

医療的ケア児への 安全な在宅移行支援

「小児在宅移行支援指導者育成研修」
修了者の活動レポート

第2回

岩手医科大学附属病院 (岩手県盛岡市)

高度救命救急センターや災害拠点病院などの指定を受け、東北地方で重要な役割を担っている岩手医科大学附属病院。岩手県内唯一の総合周産期母子医療センターでもあり、MFICU9床、NICU21床、GCU16床を有している。

課題だった長期入院児への支援

NICU看護師長の小館千公さんは、NICUの長期入院児への支援についてもどかしさを感じていた時期に、日本看護協会が2017年2月に開催した「総合周産期母子医療センター看護管理者合同会議」に参加した。そしてこの日、小児在宅移行支援における能力強化のための指導者研修を行うことを知り、受講者の派遣を決めた。

翌年度からはじまった「小児在宅移行支援指導者育成研修」には、17年に2人、18年に1人が参加。17年の受講者は、NICU助産師の工藤貴子さんと、地域医療連携センター入退院支援看護師の大崎真紀さん。工藤さんは、NICU入退院支援係の1人で、部署内のリンクナースとして研修に派遣された。18年は、NICU看護師で主任を務める長井俊子さんが受講した。

NICU / GCUに入院した児は院内の小児病

棟へ移り退院するか、療育センターなどへの施設に転院となるため、訪問看護に同行する機会はなかったが、今回の研修で課された実習では、岩手県看護協会立の訪問看護ステーションに協力を仰ぎ、小児の同行訪問を行った。同院から退院した2歳児宅などに訪問することができ、自宅での療養環境をスタッフや入院中の家族に伝えたいと、許可を得て写真撮影し、家族に退院後の生活を具体的にイメージする資料として活用している。小館さんは「百聞は一見にしかずで、自宅で子どもがどのように生活しているかを知ることができました。実習の機会があったよかった」と評価する。

合同カンファレンスで退院検討

17年の前期研修終了直後から、工藤さんと大崎さんは、研修内容を受けて院内での取り組みを開始した。大崎さんは、地域医療連携センターという中立な立場から関係部署に呼び掛け、新たに「小児科合同カンファレンス」を月1回開催することとした。出席メンバーは、小児科、NICU、MFICUの各医師や助産師・看護師、地域医療連携センター看護師、搬送コーディネーター（小児科付メディカルクラーク）、社会福祉士、薬剤師など。研修で提示された「NICU / GCUにおける小児在宅移行支援パスと教育プログラム」を参考に作成した「小児在宅移行支援共有シート」と、工藤さんらNICU入退院支援係で作成した情報収集のための「NICU退院支援カンファレンスシート」を基にカンファレンスを行い、退院へ向かう児の状況を確認する。この仕組みで在宅移行を支援した患者数は、延べ23人となった（17年4月



上段右から小館師長、
長井主任、下段右から
大崎さん、工藤さん

～19年5月現在)。

小館さんは「18年3月にNICUで勉強会を行いました。退院支援は師長・主任レベルの人が行えばいいという考えもあり、職員全員で共有していくには時間がかかる状況がありました」と振り返る。研修後に作成したカンファレンスシートは運用しながら改訂し、ことしから「NICU・GCU小児科合同カンファレンスシート」として記入項目を整理し、使いやすいA4サイズで試用している。退院支援に関する教育プログラムの整備はこれからとなる。小館さんは「NICUの教育プログラムを作り、その中には退院支援のことも盛り込んでいきたいですね」と構想を練っている。

ことし9月の新病院への移転後は、NICUは24床、GCUは14床に増床し、総合周産期母子医療センターの機能強化を図るという同院。今後さらなる役割が期待されている。

【病床数】病院全体48科1,166床、MFICU9床、NICU21床、GCU16床【看護職員数】看護師1,319人（NICU・GCU79人、内：助産師8人）【NICU平均入院日数】42日【NICU入院児数】年間150人（1,000g未満33人、2,000g未満72人、2,500g以上45人）